
宝くじ七不思議奇譚（１～４）

山之口 博道

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

宝くじ七不思議奇譚（1～4）

【Nコード】

N8148F

【作者名】

山之口 博道

【あらすじ】

宝くじにまつわる都市伝説です。

その1〜その4

その1

ある男、町を歩いていたら、ひらひらと目の前を紙切れが、、、拾ってみると、何と宝くじ券。なんだいつまんないと、捨てようとしたら、
丁度、宝くじ売り場が街角に、おばちゃんが店を出していたので、「ちょっと見てくれる。」と、券を出して調べてもらおうと、1000万円当たっていた。

その2

ある男、宝くじを買いに行った。並んでいると、突然割り込んできた人相の悪い男、仕方なく順番を譲ってその男の次を買った。
そして、ひと月後、当選番号発表日、調べると、なんと、5000万円当たっていた。
もし、あの時、あの男が割り込んでこなかったら、自分に来る5000万円券は自分の次の人のところへ行っていたことだろう。

その3

ある男、最愛の妻をなくして丁度葬儀の日。
これからどうしようと、涙に暮れて、葬儀会場へあるいていると、ふと道端に宝くじ売り場が目に残った。
そして、ふと買ってみようかと思ったという。
こんな日に、宝くじなんて。

でも、何かひっかるものがあって、ポケットに手をつ突っ込むと、1000円札が1枚あった。
で、200円券を5枚だけ買ったという。
それっきり忘れていたが、
49日も終わってふと、ある日、礼服のポケットを見ると、そこに宝くじ券が、
思わず捨てようとしたが、待てよ、と気を取り直し、
調べてみると、3000万円当たっていた。

その4

その日は飲み会だった、
宴もたけなわの頃、福引会が始まった。
その男、籤運なく、末等の宝くじ券1枚だった、
もちろんそんな物すっかり忘れていた。
数ヵ月後、背広をクリーニングに出し、
数日後取りに行くと、
店の人がこんなものが入ってましたよ、と1枚の宝くじ券を手渡し
てくれた。
なんだこんなもの、
しかしふと気になって宝くじ売り場で調べてもらったら、
1億円当たっていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8148f/>

宝くじ七不思議奇譚（1～4）

2010年10月15日22時47分発行